

菁莪つれづれ (その三)

昭和二十七年二月創刊の田川東高校文芸誌「菁莪」の記事を紹介しています。

今回は「菁莪四号」（昭和三十年発刊）より、山下眞先生の山岳部冬山報告の記事を紹介しませう。

（菁莪に関する皆様の思い出や感想等をお寄せいただければ幸いです）

三十四年卒 前田 晃稔

英彦山の一夜

（田川東高山岳部顧問）山下眞

一月十五日、成人の日に続く日曜とあって、僕らの汽車にも二十人近くの登山者が添田から乗ってきた。（中略）バスで銅の鳥居に十三時四十分着。シュラフ（寝袋）を濡らさないよう、又、リュックの帯をしめ、背にあたる「なり」を整えて、頂上までつらなる石段を上り始めた。「実に調子がよいぞ」と思ったのも束の間、奉弊殿まで行かぬ中にリュックは肩に食い込み、息が切れ、汗が流れて一步一步を引き上げるのがやっとだった。

担いで石段をのぼり出した。トレイニングなしに、急に重い荷をかついで登り始めたのだから無理もない。後から来る人たちに幾組も追い越されてしまった。それでも中腹まで来ると、どうしたことか3人とも平常の調子が出て、足の運びも早くなつて来た。（中略）

頂上に着く。一面の霧氷だ。風が強くて寒い。時計を見ると丁度十六時。実のんびりと「今日中に着けばよい」を忠実に守ったものだ。（中略）

※ ハアハア息を吐き励まし合つて登る師弟三名の姿が眼に浮かぶ。へたり込んで泣き出しそうになっているのは生徒の方である。私の場合はそうだった。先生は、決して弱音を吐かず、「頑張れ！頑張れ！」と後ろから励ましてくれた。敢えて、「生徒は」と書かないところが、先生らしい。師弟同行である。

（上宮にテントを張り夕食の準備にかかると。）

（スキ焼きの）肉の脂がスピア（ガソリンコンロ）にかけてコップフェルの中でジュージューとける。脂が匂いと共に天幕一杯ひろがる。スピアの火はいよいよよさかり、山と積んだ野菜が下へ下へと沈んでゆく。もう一刻も待てない。ハアハア言いながら、口をとがらして食う味によさは、何とも言えない。

『もう缶詰の時代は過ぎ去つたねえ！僕らの山行きも何んぼか進歩したものだ。』

『先生、1年ん時霧島に行つてから、二日間缶詰食うたらあいてしもうた。ゲッ

ソリけー。あん時の味噌汁うまかつたあ。』『そうやろうのう。初めん中はいいが、同じ味やけんやっぱあ、飽くのう。』

など懐旧談がとび出し、この夕食はやつと三時間後に完了したのであった。もうとつくに日は落ちて、外は真暗、風が唸っているばかり、ここ頂上には僕等以外には誰一人いない。温度計は6度を示している。もう眠る以外に何もすることがない。T君の持つて来たサロンパスを胸や腰に貼つて、リュックの衣類を全部身につけシュラフにもぐり込む。温度計は1度に下がっている。外のものを見れば、これは零下4度である。（中略）

Y君が小便に起きて目を覚まされた。風は衰えることなく吹きつけ、雪は降りつづいてる。

時間は四時二十五分。外は零下九度、天幕内は零下五度。再び眠りにつく。次に目が覚めた時は七時十分。シュラフに入つたままミルクを沸かす。昨日入れた筈の水筒に水が入っていない。「夜中にお前飲んだんやろうが」「嘘言え！お前飲んじよらせんか」などと言ひ合つていたが、実は水は水筒の中で氷になつて出ないのだった。そこで雪をすくつてきて水にしたのだ。

「今日登つてきた人には、ミルクを一杯ずつおごつてやろう。温いのをどうぞとやつたらどんなに喜ばれることだらうかねえ」と真剣な気持ちで云つていたのが（中略）「暖かいミルクをすぐに持つて参ります。靴もお脱ぎになつて下さい。もう一枚シャツをお取り下さい」と何時の間にか、昨年の子饑会にT君が